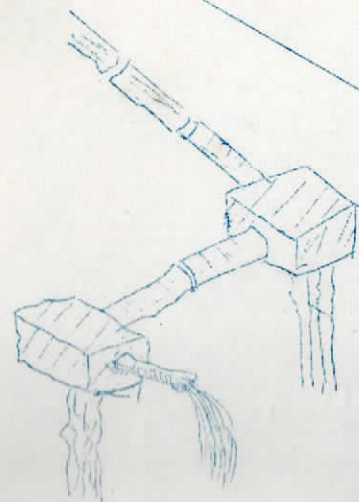


No. 6

付、名大祭資料



= 文集 =

「母繞」
「紙界」
手世
のな題し
るさ無と
か小民
庶戸
呼

呼戸び思った
「雑 (漫) 題」
TBRUCHSTÜCK

= 自己

紹介ニと私「獄」
紹良と金地「介」
除馬金紹「介」
受己紹紹「介」
自己紹紹「介」
宿己紹紹「介」
言己紹紹「介」
味己紹紹「介」
集大學生のたわ言

敏敏明德博永
美雄全
善善義明正義
金可
野野太藤村川
田田
平耳高伊井西
伴柴池

陽敏懷美雄
修博友Y
木羽部山井
金月部青風Y
加藤

以上原稿を提出された人たちに
対し乙氏名をもって表彰します。

二 名大祭資料 二

尾張藩到王

- ・尾張藩通史、尾張藩中期のあれこれ
- ・御土居下屋敷の著者人物のあれこれ
- ・熊沢のくらし

都市計画班

・名古屋の町の形成・侍屋敷の配置
・名古屋を通過する街道

祭班

一年間をふり返ってみて今感ずるのは、短かったということである。又、誰もが感じていることであろうと思うが、この一年間何もせずに過ぎ去ってしまったような気がするのである。そして、刻々と二十代に近づくかと思うと、この十代という青春時代を無駄に過ぎてしまったという虚無感がつのつてくるのである。せめて後々月間という十代の終わりだけでも有効に使いたいと思っている。おまえはこの二十一年間に何をしたのかと尋ねられても何もしなかったではないか。ただ単に名前だけ学問と呼ばれているものを学んだだけではないか。講義を聞いてもその講義が思考の一端となることもなかった。ただ遊んで過しただけである。そういう一番ダメな道をたどってしまったような気がする。そして今漫然とした大学生活の軌道を歩んでいるような

だなと感じるのである。散漫に日々を送っているより、自分なりに満足し、充実した学生生活を過したいのである。何かしなくてはならない、なにかしなくてはならないと思うのである。この教養時代という一番自分の時間のもてるとき、十代の終わりというこの青春時代に何かしなくてはならない。きっとこの時代をふり返った時に自分は後悔するであろう。何か散漫と書いてしまったが思っていることの百分の一も書き表わすことができなかった。何となく十代が残りおしいのである。おそまつながらここで僕が暇つぶしい書いた超短篇小説を。

「あの頃」

平野善敏

彼とM子が会ったのは半年ぶりであった。何となくも会っていないような感じが彼にはしたのである。といって彼はM子のことを忘れていたのではない。彼が彼女のことを考えなかった日はなかったくらい

れども、一たん軌道に乗ったら簡単には抜け出ることにはできないのである。ただ気休めに本でも読もうとする。読んで気休めになっても何ら充実感はいりてこないのである。ただ遊びに熱中するのだけはやめようと思う。

しかし、何をやってたらいいかわからないのである。今の生活を考えてみると自分でも満足していない日々を送っているのである。これではいけないと思いつながらもどうしてもその生活から抜け出ることができない。学生運動に熱中している者を見ると、何かうらやましくなるような気持ちがある。ある自分なりの一貫した理論をもってそれに励んでいるのである。理論の中にある疑問点を話しあい、あるいは討論することにより、その理論を一層明確にし、理論を首尾一貫していくのである。そんな充実した生活を送っている者を見ると本当に学生

である。考えなかった日は非常に疲れて帰って来た時か、徹夜で友達と語り合った日ぐらいであった。床にはいつラジオのスクイッチを入れるとM子の笑顔が彼にいつも浮んでくるのであった。大きな愛らしい瞳、親しみと気品さを合わせた口もと、その中に見える真白な歯。彼女の笑顔が彼の脳裏には焼きついていたのである。小さな喫茶店で笑い声の絶えなかったあの日のことなどが彼の頭の中を走り回っているのである。そんなわけでも床についても彼は眠れず、朝いつも母親にたき起されて学校へ飛んでいく始末であった。そんな雨のある日、M子から電話がかかってきたのである。話したいことがあるから会ってほしいとのことであつた。彼は自分も話したいことがあると言つて、前に二人でいっしょに入つたところのある喫茶店で待ち合わせることにしたのである。

その日は小粒な雨が真珠を連ねたように

ふりそそいでいた。街角のネオンの赤・青・黄色が鮮かな一松の絵模様を雨にぬれた歩道の上に描き出していた。その日は日曜日でもあって、喫茶店の中はほぼ一ぱいであった。彼がドアを開けて中へ入って回りを見まわすと、M子が隅の所で手を振っていた。M子はブルーのワンピースの上に黒いコートを着ていた。肩にもたれている長い黒髪が彼には印象的であった。長い黒髪を見ると、ふと彼の胸になつかしいあの頃が思い出されるのであった。

「やあ久しぶり」

「こんばんわ」

「長く待ったかい」

「今来たところなの」

二人の会話は何となくぎこちなかった。彼はコーヒーを注文し、そしてウォーターを一ぱい飲んで話をきり出した。

M子さんの話は何ですか」

M子は何にも言わずにうなづくようにコ

しかしこのようなことが一か月以上も続くと彼の胸には、何か裏切られたような気持ちになった。日々がたっにつれて、彼はM子に対する憎しみがつのつて来るのであった。憎しみはあってもやはりM子を許してやることはできなかったのである。

彼は日を追うごとに無口になり、学校において一人である時がますます多くなっていた。彼の顔からは笑顔は見られなくなってしまうた。そんな彼は毎日一人で音楽喫茶に行き、一ぱいのコーヒーに二時間三時間も費しているのである。音楽を聞いているのかと思えば聞いているのでもなく、ただぼんやりとしているだけであった。彼にはこうしている時が、一番幸せであった。そんな日を彼は過していた。

ところが今日の彼のとなりには、ミニスカートをはいに口紅を真紅につけた、マニキュアを真赤にぬった、そして髪の毛を茶色にそめた女がすわっていたのである。

「ヒーカップを見つめていた」

二人の話したことは、これから又以前のようになおおうということであった。そして今度の日曜日に又ここで会おうということに決めて別れたのである。

彼はコートのえりをたてて雨の中を歩いていた。いつもなら電車に乗って二十分程かかる距離ではあったが、今日は何となく歩きたかったのである。かさの上にはふりそぐ雨が彼は何ともいわれなく気持ちよかったのである。

次の日曜日、彼はあの喫茶店で一時間待ったがM子は来なかった。

その日からもう一か月たった。しかし彼のところにはM子からは何ら連絡もなかった。はじめのうちは、彼女が急がしかったから、あるいは都合が悪くなかったから来れなかったのだろうと彼は思っていた。彼はM子の言葉を信頼しきっていたのである。M子のことは疑がおうとしなかった。

彼はそんな女の名前なんか全く知らなかったのである

へ終わりへ

（休憩室・数学頭の体操・自己拘束）

一 マッチ棒六本で同じ大きさの正三角形を四つつくれ。

二 四角形をつつの直線で切って四つの三角形をつくれ。

三 ある家族のすべての成員の年齢をあわせると七三〇になる。家族は、成員は父・母・姉一・弟一である。夫は妻より三〇、姉は弟より二〇多い。四年前にはあわせて五八〇だった。

現在のそれ、その年齢は。

四 机の上に三匹のハエがいる。二匹がそれぞれ速さで垂直に飛び立った。二秒後に残りのハエが同時に、30の角度で

25%の速さで飛び立った。四秒後に三匹のハエは同一平面上にあるだろうか。

五 ある集会上に225人の人が集まった。知り合い、同志が同時に握手した。その時参加者の少なくとも一人は偶数人の知り合いと握手したことを証明せよ。（現代数学2月号）

母がろの手紙

高木義明

高木義明

人間は自由なものと生れ、
 自分が他人の主人であると思つてゐるよ
 うなものの、実はその人々以上ボロボイな
 のだ。
 暴力は一つの物理的力である。それはい
 ちの結果しうるか？ 暴力に屈するものと
 やむを得ない行為だが、意志による行為で
 はない。それはせいぜい、慎重を期した行為
 なのだ。いかなる意味でもそれが義務であ
 りうるだろうか？

（社会契約論より）



大学紛争の激化によつて
 多くの学生は過激な行動に走り、つ
 いには政府の府の中へ追いつたところ
 がある。又ある学生は、ひとり悩み苦し
 む自叙

してゆく。このようは表面に表れる学生
 の連中や自殺をする、大学を待つ親は、
 悲願する。彼の母親も又、そんな母親の
 りどあつ、紛争がエスカレートすればす
 るほど、手紙の内容はしめづきつてく
 るのである。彼はそんな母親の姿を思ひ
 へる時がしばしばある。そんな時、彼は
 大学から逃がしたくなくなる。このよう
 な母親の切実な懇願を振り切つてしまふ
 らは、青年に参加しなればならぬのだろ
 う。おれひとりくらくらい、いやな
 けれど、学校へ行き、クラス討論に参
 加してゆくうちに、彼は母親の姿がうす
 れていくのである。

「……お前は長男なんだから、家もつ
 けられたいけたい。私達もお前をたよ
 っている。どういふことを考へるとお前
 は行動はとれないはずだよ。……とこ
 んどは、脅迫めいた手紙を送る。……」

「……お前は長男なんだから、家もつ
 けられたいけたい。私達もお前をたよ
 っている。どういふことを考へるとお前
 は行動はとれないはずだよ。……とこ
 んどは、脅迫めいた手紙を送る。……」
 後輩、又と懇談は同じ問題に苦しま
 る。我々の時代だけでは済まな
 ない。我々の時代だけでは済まな
 ない。しかし、この社会の急変を
 ストジクさせてはいけぬ。少しでも度
 の、まだ当然のこととして家族制度を確立する

科になつてゐる。昔のように明確ではな
 が、この半封建的家族制度は、まだ農村
 は生きつづけたいものである。これは
 ひとつは精神的な圧迫であり、何かを
 うとするとき必ず、おさえつけるので
 せよ。それを自ら守るのけることのむづか
 しいところ。家は自給地であつた。生まれ
 ながら、この家が、なうされて来た。者
 は家の龍虎は、自己否定であり、類人
 間であつた。現在の社会が家族を基本
 単位として成り立っている以上、家は
 なくなるであらう。羽仁五郎は、都市の



り、我々の行動に待つたをかけるのだ
 かし、彼にとつては、母は依然と
 母であり、母を裏切ることは彼にとつ
 て残虐な行為なのだ。あえて鬼となる
 であらうか。母と闘つことは、自分と
 闘つてあり、最大の自己変革であるか
 らない。闘争に参加していく中で、母
 得するところか、彼には必要ではない
 か。自己を欺かないために、母の
 にも。

母さん、僕らはしななければならぬの
 ね。わが下さい。世の中のために、
 のために、お母さんのために、僕自身
 めにやつてゐるのです。大学をあるや
 りに変えなければなりません。社会をよ
 き方向へ向けなければなりません。我
 輩は、なうないのです。お母さん、
 下さい。……彼の国は、
 知まうといつてゐる。お母さんのため

論理の中、人間を楽しく生活させ、解放
 させ、救うのは都市であり、家族からの解
 放なしにして都市自治体は成り立たないとい
 っている。確かに、家族、お母さんといふ
 ものを、もつと広いところ、すなわち社会に
 とかし、込んごいかなければならぬであら
 う。

彼にとつては、この家族と同様母の存在
 というものも、彼が何か大きなものへぶつ
 がつていく際、足をひっぱるものの一つで
 ある。母、という人間がある以上、彼は何
 もできない。実際、母、というのは恐ろしい
 力を持つてゐる。太平洋戦争においては多
 く父や兄が、母ののために死んでいった。
 母は、ナチスナリズムを育てたのである。
 我々は困難に苦しみ、母のもとへ逃避
 し、慰めを求めようとする。そうしてい
 るうちに、母のイメージは我々の心につ
 かり、はめ込まれ、母の力は増してくるの
 であり、ついには、母の存在が精神的圧迫

氏名	出身	身長	学部
全和敏	金沢大	高	法学部
孝善	大谷	高	法学部
野善	大谷	高	法学部
食美	大谷	高	法学部
義明	西垣	高	法学部
敏雄	海官	高	法学部
猛雄	官	高	法学部
哲雄	宮	高	法学部
吉	東	高	法学部
豊	橋	高	工学部
農	農	農	農学部

続『小さな世界』

伊ト

Y氏は姥杵期を迎えた女のような姿で、唇を口笛を吹くというよりは、ただ息を馬鹿のようなふふけた汚ない嘘と共に、得意気にけき出していた。

「ユニシール・ユニシール・フハーケロケロ」まるで蛙の鳴き声のようだった。

Y氏は三十を少し過ぎたばかりの、頭ばかりが不均合に大きく、目玉がぎょろぎょろして、いつか何かを睨みつけたいと気が悪くなるという奇怪な人物だった。この男がまたまた世にも有益と自称する薬を発明したのだった。

名付けて「睡眠改善玉悪玉自己発生型裁判官見驚聞欽弁護士不可生計」

為乞食使六法全書便所紙枕下着司法試験受験生並並輩という長たうい名だが、すぐその効用があるという一見便利そうなる薬だ



とになった。コンビュターによって、さく過去全ての犯罪記録を分類・整理し、その情報に基づいて頑丈な箱が作られた。その箱は空気で作るべしという解答が出された。

刑務省も頻繁に往復している連中がこのことを知って、続々と犯罪学者外地学会に集まって来た。彼らは金庫なら、いかなる合金金属で作られていようと、小指一本で成功破壊という腕前を、たつわすのぞいてみた。だが、空気の箱に対しては見ただけで開いたことなど皆未経験だったのだ。異例の緊急理事会が召集された。犯罪学会応用科希望の会員が集まった。肥満で出づその議長によつて会議は進められた。本議題に入る前に報告者の決定、



座席の決定、唇眠り罰金額の決定……と逐々と

熱っぽい雰囲気のうち

いっつが彼は多くの人々に取囲まれていた。上はひげ一本を剃るのがあったいないという億万長者から、下は悩味噌が〇〇〇〇〇〇一ミリグラム足りないばかりに金という概念が、どうして居場所を失ってしまいい、おれは貪欲だ貪欲だと言いつつ、一万円札を吹かす次へとトレットペーパーにしている貪欲の権化みたいな男まで顔をみせていた。

それを最近、とみに珍客珍聞に飢えているマスコミが今に才太陽と月が結婚するかどうかのような騒ぎで本社へ記事に送っていた。



この発明品は、世の驚嘆のまなざしの中を、裁判所に送られることになった。一か、この薬が何者かに狙われているという情報が入り、嚴重なる装備をすつて送るこ

に会議は進行した。だが本議題に入るや否や、さすが頭がよくせ渡りを知っている連中である。た、た二秒で決議がされた。空気の箱とはつまり箱がないのに等しい。よって幼児級の犯罪技術をすつておれば、たやすく成功できるはずである。この犯罪に必要なき口は念の為に犯罪学会報に載せることにする、よって三下級にやらせるのすおとなげないの、百二十五下にやらせることにする。我々は速刻成功パーティーに移ることにする。

三十日に及ぶ会議は閉会となり、さく百二十五下は犯罪をするべく現場へ向ったが、翌日彼の自殺死体がおめい首をいめて上がった。薬輸送車は彼が着く前にすでに裁判所に無事に着いていた。

家庭裁判所では離婚訴訟が行われていた。離婚を訴えた夫の理由は猿轡躑躅米というまだ一度も作つてくれないことのない

中国料理やその他の西洋料理は作れると言
うがインスタントラーメンの作り方、一つ
も知らないのでは私を



創死させる結果をきたす
ことになる。そのような
事は毒でないというので
ある。毒は毒の方で、彼はすぐに社長に召
さる。約束するが五十年平社員の手月給とリ
ン。これでは私ガガわいそうだといい訴
いだ。隠当を裁判長は始めて薬を使うことに
した。

毒はその毒の座をさることを了解し、夫
は毒を悪人星に追放することになり満足し
た。まことにスミーズに行つたのだ。かく
して、この種のめんどうな訴訟を本人達
の意志で単純明快に解決した。訴訟を明晰判
断に分つこの薬の使用価値はたちまち急上
りした。

Y氏は次の発明品を考案すべく薬の代金

裁判を執行した。

正義感に燃える学生達は世の悪を目のか

きにいた。

世論は平静におどつていた。
勝利の笑顔と満身にたたえた
裁判長は、デモを横目で見ながら



がやいた。

正義感か、おだてにのつておつて、やつら
世間を知らん存、マスコミは学生に同情
て正義感にあふれての行動だとか、素直
そうさせるのだといつておるが、世間は
うあまくはない。彼らは世の中を正義で
り切れると思つておるが、現実はそのよ
なものでないのだ。彼らは現実、真な
人間の世界を知らないのだ。正義感とは
返えりの無知なのだ。馬鹿で低能児に等
きものなのだ。世間を知らないから、人
を知らないから、あちや正義の名によつ
て責任に行動できるのだ。本当の人間を
た時、その時始めて絶望はいかなる

三億円をたすさえて、環境のすばらしい春
日井のある別荘へ行つた。一ガ一彼の回
りにはいつオファンガつめかけた。食事
に、便所にきつて来たのだ。服は破られ
髪は抜かれ、門札まで盗まれてしまった。
服を都合したりした短毛剤を使つたり門札
を買つたりしてゐるうちに、彼はいつのま
にか無一文になつてしまつた。数日後、彼
の姿は橋の下のむしうの上に現れた。

汚職事件を調べていた捜査二課は、汚職
が保守党全体に及ぶことを感づき始めてい
た。だが、逮捕された悪山代議士は、悪人
星に追放されるのを恐れどうせ追放される
のなら自分だけ忠義を立てることにしたいと
思い、汚職の全面的発覚まで黙秘権をたく
みに使つた。

国会の週四は学生のデモで濁りつゝ、
首相は憂え、それを察した裁判長は悪山代
議士を他の罪で起訴し、薬を作つて早期に

そのか知るだろう。

Y氏は拾つた新聞の三面記事で薬の
実際の効用を始めて知つた。現実には打ち
がれた彼は、自分の変容に気づいていて、
彼は犬のめいをぬすんで



生きていたのだ。彼は本
能だけの生活を送つていた。
彼は動物的な直観をもち、
世の行く末を感じ始めていた。数日後
彼はとうとう発狂した。

最高裁判所では地球始まつて以来の論戦
が行なわれていた。起訴されたのは殺人罪
二十三件、詐欺罪五十四件、横領罪二十六
件、窃盗罪一件、女を犯すことに類する罪
数え切れずという悪人と形容するのを要を
得ない大悪党だつた。問題は、これだけの
ことだつたらよかつたのだが、又薬の登場
が必要なかつたのだ。この被告人の弁護

はどこにあるのですか。神の存在できたのは、逆にいえば神の存在する価値は、悪にあるのです。つまり神の威厳は、人間が悪人だから生じるのです。もし人間が善人だったら誰が神に見向きもしなかったでしよう。イヴが禁断の実を取ったその時に、神は神となつたのです。だからもし善人ばかりの世の中になつたらうば、神は存在しなくすくなくなるのでは無いのでしようか。ということ、は、存在していない神にあなたが従うのは、おかしいのではないですか。つまり人間をそのように、つまり善なる中の悪なるものとして、認識するのは、神の奴隷の考えである。いまこそ、人間を、悪なる人間を見つめるべきなのです。世の中とはそういうものなのです。善人だけの国など、全くナンセンスです。

我々は、元來善人を好みます。世に悪人がいるのはなぜでしょう。環境のせいなのではないですか。もしそうだとしたら、人間は

ののですか。そうすれば、極端な裁判官も路頭にまようことになるでしょう。もし生活能力がないとしたら可愛い妻や、にくたら子供はどうなるかご想像ください。それから世の推理小説家も泣いてしまいますよ。あなたはこの善人達を見殺しにしろというのですか。すばらしい国を作るために、この善良な市民達を犠牲にしろとおっしゃるのですか。

社長、あなたの論拠は時間という概念が全くかけているようですね。先の鳩のたとえのようにあなたが見解は、全くのナンセンスです。

あなたは、それでは今あなたの生存中に、その変化が起きたらどうしますか。あなたはきつと今の生活をとるでしょう。あなたにとって世の善よりも、まず自分が、妻、子供がかわいいのです。人間とは、そういうものなのです。そのような人間を、あなたは悪人だというのですか。この現実

物体よりキ又生命のないものよりキ下になるのではないでしょう。物体に人間はあやつちかっているのではない。人間が理性を失ったすばらしい意志を失った生物であるとするならば、悪人は悪人自身の意志によるのです。よって我々は悪人には悪人に適当な責任をせよとて又善人になる見込みなきものを、悪人星に追放するのです。

社長はなお平然として曰く。
「世の中が、善人はかりとするならば、孔子とかカントのような偉大な道徳者は必要なくなるでしょう。またあなた達が若い時に、六法全書と共に寝起し、必死になつて見たあの学生時代の生活も無意味になつてしまふのですよ。そして司法試験でせ、かく世渡りのパスポートを得てキ、世になるのです。それに善人はかりの世の中には、どうしてあなたが生きていけるのでしょうか。善人ばかりの世に善悪を裁く裁判所など、どうして必要とおっしゃる

こそあなたなのです。どうかこの現実の人間を救ってください。私を含めて。」

「社長、現実です。たいてい、この世の悪を見捨てよというのですか。今のような対策なさきつと、その前に地球は滅んでしまふでしょう。」

論争は永久機関だ。だが永久機関は存在するの。当惑した裁判長は、懷疑論に落ち入り、考えるのをストップした。判断中止こそ、今は望まれた。平靜な心持になりたかつた。それ以上考え続けるには彼の体力がゆるさなかつたのだ。人間としての彼の能力がゆるさないので。

かくして葉は使用され、裁判はあつた。被告人は即座に悪人星に追放された。△口社長も悪人星で生活することを目指し、一結に同行した。かくして地球上には発狂したと伝えられてゐるY氏の姿を除いて誰一人見出しなくなつた。

『私の郷土感』

伊ト

郷土は凡人に歌われたあの万葉の昔から現代まで時には親と、時には夫か妻と、時には子と一体化し人間生活の最後の拠点として、安樂の極地だった。

それはまさにやさしいおふくろの味だった。だが郷土が変貌するようになつた。郷土感も変化して行く。郷土は人間誰しもある。しかし郷土感はその人間に自覚された、その時に始めて成り立つ。そして現代には現代の郷土感がある。それを明治以後とくに戦後とくに著しい。それは新しい郷土感が自覚され始めた時期にまさに對峙している。

現代の郷土感とは現代の文明と比較するこ

とによって成り立つ相対的存在である。その郷土感とは現代の非人間性に対して異なるものをも人々は求めていく。その一つの方向が郷土だ。たのだ。その他に文学と美術、社会運動などがある。それらは現実によってその基盤を同じくする。

人々が故郷を離れた時それキ一人一人という意識ではなく、ある程度以上の人々の集団が故郷を離れた時にその可能性は始まり、目的先の不毛の中で始めてそれは意識に上る。その意識はやがて知識階級によって明確にされるはずだった。

それを現実的にみるならば都市化がそれである。そして現実の不毛、その中で人々の意識は多くの方面に向う。そして誰かが現実的に生活の最後の砦として持つことのできる方向にあるものそれが郷土である。

直系林であること、現代の非主体性に対して主体的でありうる場、そう感ずるこれが郷土感である。郷土感はおくまで郷土感であつて郷土についての知的な思考ではない。まず郷土感があつて、それから郷土的思考がある。その郷土感とは現実の生活から生じてくる。郷土感とは感じるのであつて客観的にそのようであるのではない。

3 現代人は心のふるさとを失つたという言葉はちよつと原子時代の土器が注目さるが始めたのに応ずる。前者も後者も自覚され始めた現実に対して批判の目が向けられるようになったその時に叫ばれるうになつたのである。

4 現実が繁栄の夢ではなくなつたと思つたとき、そう人々が思考するようになったときにその自覚は始まる。現実に欠けて

する意識がより先に生じる。その意識は郷土感を具体化より抽象化する。そして国民全ての人々の意識に共通の郷土感が作られてゆく。

8 我々はこの消極的な社会批判の目を積極的なものに成長させて行かねばならぬ。郷土の中に何があるのか。なぜ人々は郷土に親しみを持つのか。我々は郷土感を郷土的意匠にまで高めて行きたいと思う。

9 民芸品の素朴な手作りを見る時、我々の人間のある可能性を発見する。我々にはまだ多くの可能性を持った人間として、その素質の発見に努めるべきだ。その可能性を郷土の中にある過去の我々ではない人間の才能の中に見出し得たなら、我々の人間の幅が又拓げることが出来るであらう。

「生活の類から、その重みに根ざした数々の言葉」

今まで「庶民」というイメージを、一種のものがれり如く、ユートピアの如く、自分を感じていました。ユートピアが、現実との断絶から生まれるとしたならば、これら北上の農民の生活は現在の自分の生活とは全く断絶してしまいます。しかし、その言葉には、断絶のままだは放つておかせない重みがあるのだ。農民の生活は「この世に生かされて死んでゆく生活」と言えます。日一日がきつて生活との闘いであり、働かなければ食つてゆけない生活の苦しさがあります。そして北上の農民が生きることに精一杯だということも確かです。しかし彼らが、現実世界を忘れているのでは決してなく、若い世代は、新しい農村のあり方を求め、変えて持ちながら、現在の苦しい半端な生活を歩みつづり、貧しさに負けずに、生

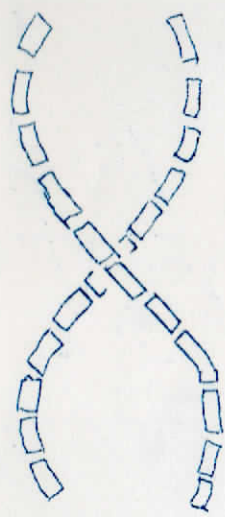
多岐亡羊

楊子之鄰人亡羊。既率其黨、又請楊子之賢、追之。楊子曰、嘻。亡一羊、何追者之衆。鄰人曰、多岐路。既而反。問獲羊乎。曰、亡之矣。曰、奚亡之。曰、岐路之中、又有岐焉。吾不知所之。所以反也。楊子戚然變容、不言移時。不笑竟日。門人怪之、請曰、羊賤畜、又非夫子之有。而損言笑者、何哉。楊子不答。門人不獲所命。弟子孟孫陽出以告心都子。心都子他日與孟孫陽偕入而問曰、昔有昆弟三人、遊齊魯之間、同師而學、進仁義之道而歸。其父曰、仁義之道如何。伯曰、仁義使我愛身而後名。仲曰、仁義使我殺身以成名。叔曰、仁義使我身名俱全。彼三術相反、而同出於儒。孰是孰非邪。楊子曰、人有決河而居者。習於水、勇於涸。操舟雖渡、利給而口。襄糧就學者

きこゆミウとしています。そして社会思想史で讀んだ如く、階級意識といえども、各個人が自分のものだと意識しないがザリカとはなうはいと思えます。

このような「庶民」は、北上の農民だけでなく、この都会にもいることとせよ。農村の、そして都会の「庶民」のことを、自分は考えます。そして、ふとそんなことを思っている自分の「余裕」がつかずります。

去年三月卒業まじへ単位不足でちよつと危ぶまれてきました。大企業の一サラリーマンです。「社会勉強の爲に就職する輩なんかりるものか、皆んなは生きるために就職するのだと、友の忠告を大切にしたい」と思っています。



友徒、而溺死者幾半。本學羽不強。利害如此。若以為孰是孰非。心都子嘿然而出。孟孫陽讓之曰、何君子問之迂、夫子答之僻。吾惑愈甚。心都子曰、大道以多岐亡羊、學者以多門喪生。學非本不同。非本不一。而末異若是。唯同反一、為亡得喪。子長先生之問、君失生之道、而不達先生之況也。哀哉。

- SIMULATION WITH RANDOM PERTURBATION DIMENSION 6(1000)
- READ AND PUNCH NUMBER OF TRIALS M
- YCO), CCO), INITIAL VALUE FOR RANDOM NUMBER
- READ I, M, N, A, B, Y0, CO0, R, SU, SV
- FORMAT(2I5, 6F10.5, /, 1F10.5
- PUNCH 2, A, B, Y0, CO0, SU, SV
- FORMAT(8ALPH=, F10.5, 10H, BETA=

平戸で思った事 ☆

☆ L2-33 伴金美

平戸口棧橋からフェリーボート、20分程で小さな入江に着く。小さな漁村ともいえる町である。町並はこの入江の周囲に集まり、町全体にあの特有な磯の香りが充満している。史跡もまたそこにある。上陸して右へ歩けばオランダ関係のものがあり、そこから出発して入江を半周するわけである。どのガイドブックにものっている写真は中央の少し奥まったところにある。更にイギリス商館跡を通って亀戸城にいたれば、そこで終りである。史跡はそれほど多い訳ではない。だから過大な期待をする人は、失望するかもしれない。しかし平戸の持つ歴史の厚みは、それには関係なく、訪れる者の心に透み渡る。史跡はほとんど他から区別されていない。ヘタをすれば、通り

過ぎてしまいうである。中には、民家の内側にある場合もあった。だからこそ、身近な存在として心を打つのである。

平戸も又、過疎化に悩む町である。新卒者のうち、土地に残る者は約1%、ほぼ全員がいなくなってしまう勘定である。町も引き止め策に懸命である。たしかに農業、水産業を除けば、あとに何が残るだろうか。一番近くの都市といえば佐世保市位であるが、これとても2時間程かかる。それほど孤立した町である。

皮肉にも、外来者にとって、これほど都合のよいものはないのだ。雑踏の音がないからこそ、自分達を歴史の中に埋没させることができるわけである。環境が非日常的であればある程よい。彼らは4時間いるだけである。不便であり、外界から閉ざされているほうがよいのである。あわよくば、町全体を固定化したがる。彼らにはコースタウンでも見せておけば有頂天になるの

であろう。それは極端としても、とにかく、保存を願う。しかし住民達は、自分達の発展を願う。利用できるものがあれば最高度に利用するし、またそれが当然の話である。このようなことから見物人と当事者の利害の対立が生まれてくる。

町の発展と保存はまるっきり違うのである。保存をのぞむのは外来者より住民の方が強いのではないだろうか。そして破壊をきらっている外来者が逆に破壊の張本人ではないだろうか。その住民にとつて、生活している環境に何百年の歴史があるのと、なからうと、それは関係のないことだ。それらは史跡としてではなく、日常の生活環境の一部としか目に写らない。ところがそれを何か特別なものと考えるのが、まさに外来者なの



でなければならぬ。それだからこそ、住民にとつて、なにか遠い存在となつてしまふ。それは一種の略奪にも似ているものがある。住民に史跡として祭り上げ、客を集めることが意味あることと意識される。あの商業主義的社会通念を支えているのも、外来者ではないのか。しかし何といつても住民も又外来者もともに疎外されてしまふ傾向にある。最後に残るのは、有刺鉄線にかこまれた史跡遺跡になつてしまふのではないだろうか。結局なにかふりまわされているのではないか。そう考えなければ、外来者の一人として、自分自身も破壊者の片棒をかついてしまふ。いや、

ついでいるのは事実であろう。平戸はまだ

やらく将来はやうなるであらう。現に自分のしている行為が非日常化を促進している。

やんな事を考えながら、オランダ居跡の所で風をよけながら曇天の中、寒さをこらえながらすわっていた。とにかく人間は時間を持て余していると、つまらないことを考えるものだ。

子あはれ

文集の編集委員とはまことにいやなものだ。このごろ悟、たが時すでにおやかった。

。苦しき中に詠める歌二首

請求すれど請求すれど、

なほまだ皆原稿を出さず、

じっとパチンコをやる。

いよいよ夏、夏はいいナァー

だからい、やう考えた。しかし何もでてこない。やうで手帳を見た。何かが書いてある。やうで今回は一月から行って来たことをオモシロク書こうと思うよ。読んでいて突っ下さるならコレマタ結構です。

一月一日、今日は何か、元旦だ、とだれでも気づく。内容があまりおもしろくないのでヤメタ。一月三日、熱田神宮へ初詣に行く。おみくじ大吉、正月から幸運だ。一つ恋のことについてはこう書いてあった。ひかえ目に出版ば、きつといひことあるべし。やうでばくは思った。これからにカエメに行こう。しかしなかなかいいことがない。やうで、もう一度熱田神宮の同じ場所。二月十八日おみくじを引いたら、こんどは吉で、何と書いてあるかという。もつと積極的になるべし。と書いてある。やうでばくは皆に忠告する。オモシロクは引かぬべき。と。一月五日、特級酒一合、ビール一

雑談

S2-52 柴田哲雄

新入生の諸君ノもう入部して一ヶ月余リになるかしらノイヤこの文章がでるころは二ヶ月余リになるかもしれない。もうクラブの雰囲気になれたと思う。先回の文集は、ワケのわからない話を載せさせてもらったので、今回はザックバランのことを書こうと思う。本当は今問題になっていく大学立法のことについて述べることもいいが、誰かがこまごまと書くような気がする。後、後の村会にまわそう。やはり文集を読む人の為にも、オモシロくて、考えなくともよいものを書こうと思うのであります。(陰の声…これはクラブ員に対するブジヨクである。ナンセンス)

やうでばくは考えた。人間は考えるアシ

でパチンコとかいう、穴に鉄でできた重い球を入れると、電気がついて、チューリップがパツと開く穴入れ自動玉製造ボックスをやってみたら、千円もやられてしまった。やうで一宮駅前で再度挑戦したら、十分間てはいライイト六個、ヤハリ地元の強み、と手帳に書いてある。一月十八日、ドイツ語テスト、昼十二時四十五分に熱田実地踏査が行なわれた。伴君が来なかったが、途中で現われた。まるで電光石火のごとく、いやまさしく月光仮面のようであった。一月二十五日、初めて部会サボル。何故ならば、紙園祭、大学の制帽、を見に行つた。これよりも、もう一本の映画、即ち、犬安旅行は近年まれにみるケツサク的な喜劇であり、最高にオモシロかった。二十六日、名女大と話し合い、



った。この月は後期試験で勉強ばかりやっていたので、体重が五キロばかりやせた。だから、この月は勉学の月であることを定めた。試験後自動車学校へ登校す。ちやうど一ヶ月間、それは一年にも、二年にも思われるほどで、ボクには非常に苦痛であつたが、優等生で卒業できたことだけがナグサメであつた。四月二三日、新入生クラブ勧誘。一年生の中でも勧誘されたものが多いと思う。君達も来年大いにやるといいよ。オモシロイから。四月十六日、クラブ説明会。新入生九名来る。みんなシンケンな目つきをしていた。二十五日、コンパ。あまり新入生ビールのまず。飲まないでアタリマエダ。ここで一年生に告げる。郷研をもつとよりよいクラブに君達の手で作ってもらいたい。もうそろそろ時間が来た。ではオヤスミなさい。五月十六日1148PM。評：ヒラガナ、カタカナ混交文の、請求されて、しがたなく書いた文。

BRUCHSTÜCK
421 2. 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31
(日本名池田全)
現在の生活内における郷研の占める割合をみると、新学期では以前より減少している。つまり、自分の集中度が悪くなつたためではあるが、それはクラブという特性によるのだろうか。しかし自分のクラブ観は、人間関係に重きを置いてゐるのに、よこの話の内容は、或る方向を指してしまふとか、発展性がない。自分では、その基底に、一種の安住の地、つまり逃避の場としての意味をもち、又、利害打算の上にも立っている事を知っている。そのため、よこで最大の演打をし、その成果を対社会的にもってゆく。……

(しばし沈黙が続く)

(再開)

一つの集団が出来ると、その構成員は、表面的に似てくる。しかし、没個性的な状態に落ち入るならば、よこは自慰的になり、よの力は、常に爆発的な力によって、転換するのみ。



造反有理ノ

毛沢東万歳ノ

ナンセンスノ教条主義者ノ

(お遊びの時間)

自己紹介

(順不同)
とその他(意見)

「奈良と私」

1-34 鈴木陽

私は春になると、芭蕉ではないが、むしろ
うに旅へ出たくなる。そして決まって、
足古奈良へと向かってしまふのである。
もう高校に入ってから毎年奈良へ行っている。
旅って奈良の寺はほとんどいつてい
いくらい巡ってしまふ、今年も少し足元の
ぼりて南の飛鳥地帯もまわった。
初めの頃は、お夫まりの観光コースを回
り、法隆寺、東大寺、興福寺など、修学旅
行の生徒や、団体客などと一緒に、お寺く
ちくはされながら回ったものだった。
りなり、二年、三年と行くうちに、その隙
には、隠れた本当の奈良が存在しているの
を覚悟した。たとえば、法隆寺周辺には、
法輪寺、云龍寺へと続く「駒通いの道」、

「愛蔵地獄」

にやうくし

ここには今でも千二百年前の斑鳩の里の面
影が残っている。又東大寺、春日神社周辺
には、戒壇院への道、春日神社周辺には、
新薬師寺へと向かう「ささやきの小道」。
これらも道を通って目的の寺々へ向かう
時の気分は、鑑花バスなどに、揺られて
行く時の気分とくらべたり、それこそ天と
地、全くの比較にならないほどのものであ
る。そうして行ったり時に見る仏像などは、
時に美しく見えるから全く欣賞がうと思
える。

今、奈良が私をひきつけてやまないのは
この点にある。これら一つのノスタルジア
であるのか。しかし一つ他電車の話、これ
りの道や寺々が近代化の波に押し流されつ
つあるということ、今のうちによく味わ
っておこうという意識が、私をそんまにま
で奈良へ行くがためている理由かもしれない。
ともあれ私は奈良の春も奈良へ行くであらう

大きな寺の欲い！
僕を包んでしまふような
僕がその中に入って、消えてしまふよう
な。
汽車の蒙青
無人のビルに響く靴音
稲妻
夕焼けの泰山
その中に消えてしまいたい。

僕は夜が好きだ。
月がなく風があつたようなお月。
その中に立ち
春がらげ屋敷の上
遠くのネオン 快い寒しさ
かわずの大合唱
いつかあったような。

よく書きます。

歌謡は、時によりまじり、しりてきえ
び、立派なもののが好まれます。(別に高級
時代古典が得意だ、それというわけではあり
ません)もちろん意味など、一々二度三度
だけですが、やはりゆかりないことが多いの
ですが、それも古典の持っている言葉の美
しさにかかれます。またこれは一種の現在
(現況)からの逃避の場でもあると思えま
す。他に音楽の。(これは金とひまがあるもので)
ポップスを聞いたり、歌ったり(人前では
歌わない)にしていますから御心算なく
すること時々です。

以上が、僕の自己紹介ですが、僕自身、
非常にめんどくさがりであり、長身巨体であ
り、かなり強情なので、自分自身を付け
てはいるつもりですが、皆様にかなり御迷
惑をおかけするかもしれないが、何とか
よろしくお願ひします。

御世はすり、て今一番やりたいて思つて



1-20 鹿井 久雄

僕の心るまで、それは田舎
子旅のころ派手なハリー
今は着ている。

ホテルは見えない
服装をまきすみたようだ。
おたまトクしも少なくなつた。

昔の面影が

たんだんなくなつていく。
青年も少なくなつた。

毎朝も満腹にできな

道路は舗装され、

ゆりかまの家はなくなり

ビルビル町の様子は変わっていく。

これは僕の田舎だ。

いることは、各地におけるものは各時代にお
ける人々の生活の実態を語ることに。これは
資料も少なくないと思うけれど、これだけあるか
わからず、また各地にちがう伝説のよ
うなもの、郷土芸能、民芸等にも興味があ
ります。また方言を調べるのも面白いと思
います。しかし、工部部である以上かなり
時間にかかりがあるの、おぼけの機。
その他書きたいことはあるけれど、
今回はここまで。

城大野前



城古原名張尾



僕の家は変わらな

ペリー来港の前(一八五三年)に

建てられたのが屋

風雨に耐えて家を支えてきた大黒柱

煙で黒ひかりしている

太くてたのむしい

百十七年七代が家の中心となつてきた。

父は脈々七代目の主

江戸享保年間からの軒と白

どっしりとしてゆくともしない。

二百年以上も耐えてきた。

ひびがはくさんできている。

感歴史を感とさせる。

津藩の藩札も数枚ある。

向もかも古い枕が屋(家)

トクとなんともくたのむしいお家

田舎はいい。
 こころの中へ
 ひっそりとしておこう。

乙



(イダハの田舎、冬景色)

「某大學生のたけ言」

11-21 加藤幸雄

戦時商戦時代、大學生生活を夢みて、以ての事を想像せり。すなわち、大學生の所はあくまで学問の精進と真理への憧憬に非ざらんばならず。大学の大学たる所以は、その可能性の大なるをもつてこれとすと。しかるに大学の現状は、わずか一週間で、我々の眼前に、その醜態を暴露したり。我々の学生とする名を失はせ、その商戦時代に似せし性質を取り返さんと、学問への精進をも忘れ、或る者はなほそのつてを求め、又或る者は政治運動へ没頭す。元より、政治運動等とは非とするのでは非ず。その主体性のなさ、極めて、能動的なるをもつて非とす。又その国の政治を論ずるには、その事前に、莫大の精力を払いて学問することと等す。しかるに今日の学生生活家は、その己が為す

運動がはざる所の結果を平なる抽象論で置き化し、他の学生に対して「なんせん」と、口ぎたなくののり、他の意見を攻撃し、かむとせす。ああ、この盲動が、いかなる結果を生ずるか、袖のすゑ知る。

さて、我自身は、と問へば、自己批判すべし点多く有り。オード、その不和雷同姓である。何ものも持ってしても変えることのできなかり節理の堅さの穴除である。毅然たる態度の穴除である。これが為、ある悪友に教へられ、PackerのKになるもの自身を及ぼさせ、学業をおろそかにする事がざりなり。

オニに飛ぶがたに事より生ずる劣等感あり。時に生まれてきたる所をりの、その醜い子にやを補なおうと、あせる有様、まことにあさまし。去る五月迄ゆずの、態度が肝要なり。これは、これを流れている水にもあてはまるなり。いやむいなるが為に

を書き持りしが、つまりめ大勢に於て、ピカリと光るもの、それこそ郷研なり。我のとき人間と云ふ、この関係の中にては、美男子の仲間にはいり得る。又、その独創性、自性性は、他にては得不可也。

いざ、ゆかん。郷研とともに。
 いざ、はばかん。郷研とともに。

The End

(感想)

身に力けて、わかりました。
 でも、ぼくは、あなたにた
 いしゃあひません。

『ある男の紹介』

郷所に、はい、っているすべの守友諸君、
彼々は、ここで確認したいと思う。

確認事項、

一、今から述べる男は、実男子で、その子
に多くもてるといふこと。

二、さらに、彼のいいところは、一、の確認
事項を見せびらかしたり、誇ったりし
ないといふこと。(爆発的拍手)
満場一致で確認

さて、諸君、次に彼のこともよく知るた
めには、次のような事実を暴露しなければ
なりぬ。

一、大野(福井県)生まれであること。

二、頭文字が、Y・Yであること。

三、文科系でなく、理科系で工学部土木
科志望であること。

理由がわかるそうです。

四、彼のいうよりも精微で、女性の問題
世の並みの男性は、やさしいとか美し
いとかで、その子の判断するが、彼は
彼の得の直観力で判断する。したがっ
て、彼は、かといふ子で、醜悪の男の
子、そして、髪の手よりさらに、真剣
に慮をし、かつ悩んだと言う。彼の彼
たよりめっている、主な原因はこれであ
ると、自ら告白しています。

五、まだいふの、彼の切なる希望は、
インテリゲンチヤです。そして、後
の希望になると、いふまでも、いふ
っても、あきかたず、一生いふべ
いたいと思わせる子トリーヤのいであ
決して、おりやべりではない女の子に
そうです。彼の要求貫徹をめぐりて、
一人、孤軍奮闘しているありさまは
あまりに悲しめです。だから、彼とス
ラム

ここで諸君も、基本的、客観的に、
おさしがついたと思う。
ああ、なるほどな、と、うなずいてい
る諸君に重ねて言ひ。

彼々、プロレタリアート(雇用の食料
をカリーか冷し中華でがまんする人々)は、断
固、ブルジョワジーへお好む食料を一本
でも食べたく、を粉砕するたのには、彼も
る人物を本質的、かつ主観的に知りぬべ
ない。そのために、次のような事実を
知りぬべなりぬ。

一、彼なる人物は、義理・人情に明く、
きわめて浪花節的人間であること。

二、彼は今、「人生」について深く考え、
かつ悩んでいること。

三、彼の理想の女性像は、うまく口では、
いいありわけなりが、「天国に一番
近い島」の主人公、つまり著者の、
森村桂、くめしく、知りた人、
「天国に一番近い島」を讀のば、彼の

ではあしませしか、

我々は、今まで述べてきた諸事実のお
かげで彼なる人物の心の底までわかつた
と思ひ。

彼々は、前進しなけれならぬ。地球
がまわっても、四角でも、前進しなけれ
ならぬのだ。

彼にも譲りず

彼の星に負けず

彼の星に負けず

彼の星に負けず

彼の星に負けず

彼の星に負けず

彼の星に負けず

彼の星に負けず

完

名大祭資料編

第一部 尾張藩

江尾張藩通史

江戸時代、尾張一國と美濃・信濃の一部を領した大藩である。御三家の筆頭として重きをなした。

1607年豊前守に任ぜられ、徳川家康の九男長良親王が甲府から清州に移封され、さうに同ノノ耳名古屋に移り、加藤清正、諸大名の助役によつて名古屋城を完成し、尾張とした。二代元就の代までに藩政は整備され諸組織が確立した。特に1665年寛文5年木曾木材事業の藩政化は注目される。七代宗春は、將軍家宗の勤政政治に反して積極的方針をとったため、家中の生活は自由に流れ、城下の風俗はなほかになり、演劇・遊里の繁栄は、めざましくなった。このため、藩財政は窮乏して、ノ739年(元文4年)宗春は幕府から急展を命ぜられる。父の宗勝宗盛の代は、藩の中興時代で饒幸と綱紀粛正に努めた。宗盛も宗春も人材が輩出した。しかし以後本朝奇温、存莊、慶隆と続くが、藩政は衰退して幕末を迎える。ノ4代の慶勝は、田谷高嶺家より入ったが、家中はじめ、百軒町八かゝ、その人望と善政を期待されたが、彼は、徹底した攘夷論者だ。たので、紀伊徳川慶福の將軍継嗣問題では、松平慶永、水戸斉昭と共に、これに反対して、安政5年7月に、幕府より、隠居謹慎を命ぜられた。尾張では、慶勝の弟宗徳も高嶺家より迎へてノ5代の藩主とした。この時期にあつて、藩論は、軟硬二派に分かれ、前者は、佐幕派、後者は反幕派を唱えて金鉄組と称した。慶勝の罪が赦されたのが文久2年。2年後の元治元年には、幕府より、征長総督に任ぜられた。勤王が佐幕が激しく揺れ動く時代の激流の中で藩祖義直の遺訓と血の絆の板ばさみであった。

尾張藩は、あまりにも、微妙な立場にあつた。

江戸時代、尾張一國と美濃・信濃の一部を領した大藩である。御三家の筆頭として重きをなした。

江戸時代、尾張一國と美濃・信濃の一部を領した大藩である。御三家の筆頭として重きをなした。

尾張藩では、忍術の心得あるものが、極めて稀で、彼は、その中をきりめて、この人人物であった。彼は、身体が細い、柔かい極めて運動神経が発達した人であり、手足の関節を自からはずして、自から折るといふ奇異な身体の人で、従つて、細い狭い間隙など、頭及び肩が入らば、手足の関節を自からはずし、無理と思ひゆる所でも柔々と通過するといふ技ができた。又一本の綱さえあれば、如何なる高い所でも登った。それは、綱の先に特殊な鉤状の鉤を結び付け、これを投げて物にかかると、綱を引けば、その鉤は、かたく結びとまり、綱を伝へて

政は窮乏して、ノ739年(元文4年)宗春は幕府から急展を命ぜられる。父の宗勝宗盛の代は、藩の中興時代で饒幸と綱紀粛正に努めた。宗盛も宗春も人材が輩出した。しかし以後本朝奇温、存莊、慶隆と続くが、藩政は衰退して幕末を迎える。ノ4代の慶勝は、田谷高嶺家より入ったが、家中はじめ、百軒町八かゝ、その人望と善政を期待されたが、彼は、徹底した攘夷論者だ。たので、紀伊徳川慶福の將軍継嗣問題では、松平慶永、水戸斉昭と共に、これに反対して、安政5年7月に、幕府より、隠居謹慎を命ぜられた。尾張では、慶勝の弟宗徳も高嶺家より迎へてノ5代の藩主とした。この時期にあつて、藩論は、軟硬二派に分かれ、前者は、佐幕派、後者は反幕派を唱えて金鉄組と称した。慶勝の罪が赦されたのが文久2年。2年後の元治元年には、幕府より、征長総督に任ぜられた。勤王が佐幕が激しく揺れ動く時代の激流の中で藩祖義直の遺訓と血の絆の板ばさみであった。

ることができたのである。又綱の先に身体を縛り、猿の如く木から木へ、枝から枝へと飛び渡る曲芸のような技や、又は足の裏に特殊の鉄甲を付けて木に登ることは言うに及ばず、千の及ぶ高き所から跳ね上つて飛び越えた名古寺の石垣及び濠の石垣を登攀する、これは、驚くべき技である。築城の時、加藤清正が石垣を築き、その上に土を築き、築石の方法を伝へた。清正は朝鮮に於いて、築石の方法を学んだと言われ、石垣は、場所によつて上部は違ひたが、その外方に傾がついておるといわれる。江戸は、名古寺の如き場所の石垣でも登攀した。これは、特殊な帯を用いていたからだ。即ち、帯に特殊な特殊な爪を備えていて、手足及び足先にて、石垣の間隙に手や足を掛けて、と同時に、帯の爪を石垣の間隙に掛けて登つたのである。彼は、もし御許が此に、足場を作らなくとも御殿の金鉄までも、登つてみて

彼は又潜水にも巧みで、或る年庄内川で潜水の演習をした。潜水してまゝいつまどたつても上がつてこないので、見物人が心配していろいろと、けるが川上から堤を平然と歩いて来るので「目は盛った。彼が言うには、一尺程の中空の竹さえ持つておれば、絶対安全に潜水して、息が盡きなくなれば、矢付からぬようこの竹を水面に出して空気を吸い、再び潜水をする。こうして、何時間も潜水可能であり、水底を歩けば人に知られることなく、如何なる場所へも行くとが出来るのである。彼は奇行に富み、無妻であり、忍術は決して藩中の者にさえ教へなかつた。寛政二年65才にて没した。

。森島左兵衛水泳及び忍術
彼は水中で、遊泳中の魚を捕えたり、う特徴があった。文政8年9月10代藩主斉朝の御命により、御蔭の深さ、水中

III 庶民の暮らし 一 火事

6179500の石の尾張藩……御三家の一つとして、その存在は特異なものでありました。こは、藩内の様子、特に、末端部の庶民の生活はどうか、たてしうか。それを公町館などを通してうかが、こみましよう。特に今回は、財政窮乏化の一因であつた火事を中心にして、追めていこうと思ひます。

(A) 市政と町館

市政担当のため、二名の町奉行が置かれましたが、城下町支配の下郡機構としては、市民の自治組織が、認められていたようぢや。



町奉行から出される命令(法令)は、名古屋の総町代である花井氏にまかえられ、さらに龍溪町代、町代を経て、一般町人に伝えられていたのです。これを、

の状況等の調査を行なつた。豪に潜り、連綿ノが目を要し、隅々までも調査した。この潜水に於いて、落命の寸前に助けられた。所謂潜水病にかかり、6か月も静養していたという。彼は、調査の後、家人にも何人にも一言も、当時の事を語らなかつた。御蔭居下の組員にお豪の水中は、恐ろしい所だとのみ告ぐてだけであつた。

後、隠居の身分になつて始めて、御蔭り水中の有様を組員に語つた。それによると、御蔭の深さは一定せず、浅い所と、深い所があつて、深い所は、暗く充分視界はなかつた。底の水は非常に冷く、水は下より上に昇り、丁度の泉の如き感がある。よつて底を極めることはできない。御蔭の水中には一定の方角の流水がある。又、浅い所には、樹木の倒れたのが、水底に横たわり、その間に泥が溜り、足をふみ入ると、泥深くこめかふでまじ、泥に埋もれそうで、危険の上もない、などと語つたという。

(B) 火の用心の町館

火の用心の町館には、消火道具の有無の確認が、歩きながらたばこのみ申すまじくまで様々……。その中で、基本的なものを少しあげてみますと……

町館の可仕事

二面々々の家に水を汲み置き、火事之時の心懸可仕事。
三、町々に有之はし、水船、たの桶、ひしゃく、かご桶など候ハバ仕直可申候。
しかし、こんなひしゃくやうけんめは、水を出し、注意を払うように言つても、一旦火が出てしまつと、狭い街路に木造家屋、これといつた消火設備もなく、大仕事になること

(2) 史例

万治三年(一六六〇年)、元禄十三年(一六九七)の、享保九年(一七二八)の三つの大火事をはいのとして、たくさんの方々が記念されていきます。このうち、万治三年の「万治の大火」について、少し触れておきます。

・万治の大火

へ爆中の火の由、御城下過半焼る。広小路の出来る火事なり。

一、正月十四日、名古屋大火事未上刻、片端桑名町西角吉原氏より出火、寅上刻迄焼る。

二、諸子屋敷百廿軒、寺院三拾五寺

三、町屋敷式千六百、或拾八軒間敷合八千六百

百或拾三間、患尺

(3) 出火の際の諸注意

火が出ると、もえやすい木造家屋やえ、火はまたたくまにもえ広がる、大火になるおそれがあります。ごきつとく断絶れご注意します。

こはいません。

一、火事出来候時、火本より二、三之間、四ッ辻に、火をともして人を付置、火事場より諸道具、着物何れも持ち廻り候者於有之は、其者を留置させんサク仁、たしかなる者に候はば通す可申候。

時には、奉行所の方が役人が出て、番所を設けて、そこごきつとく取り調べを行なつたこともあるようぢや。

(4) 藩の救済対策

火事によつて焼け出された人々には、藩から救済の手がさしりべうあります。例えば、「万治の大火」の場合はこんなようぢや。

殿様より類火之者へ被下置候材木金子の覺、

一、御家中に高百石に付金拾兩、棟木百軒た、町中に棟木五万、町木五万、本銀千貫目、また、元禄の大火の時は、一六〇〇戸

を被下置、被下置は、この時、罹災者に対し、

一、火事出来候ハバ、いそぎ二人をたて、先々へよばわり付申候。

二、町々に火事之有、火つよく、或う々より水持ち来り候らう以後は、隣町之者は、此方之下短衣第りやけ候家の雨とわり、のやぬの上へ水を注ぎ、手づりに致し上げ可申候。

有火作業といつても、類焼を防ぐのが精一杯だ、たのぢやう。みんなものもありません。

一、火事有之候時、見物人多く候て道をたこさぎ、火消の者行通り不自由に候間、一切見物に出申すまい候。

せまい街路に、こうしてヤシウマまじくり出したんでは、厄きいせん。あたりはこんやわんやの大騒ぎとなつてしまします。ところが油断は禁物、火事場泥棒が時々出没するので。なかには、と小を目的に放火もござるものもいるといひますから、お奉行さまも黙っ

間ロ一間に對して、金一分づつを支給してあります。ミつい大火災への救済は、藩にとつて頭の痛い問題であつたことが分ります。藩は、ノクノの年に火災防衛の一方、おとしる火救済、ゆるぎを火救済に改めることを許可してあります。またノクノ7年には、火之見ゆるぎを設置してあります。そして、足輕を見張りに立たせることもしました。

しかし、木造家屋が、ざつしりと立ちならび、今と違つて街路も狭く、消火作業にはかどらぬ、おまけに効果的は消火設備もなく、隣の家を類焼を防ぐとこゝろ、いかぢやなかつたようぢや。

火事、暴風、干害に対する救済費用及び結婚等にみられる、外面の力はなかなかに耐える費用が、藩財政にまたる支出となつたといひますから、こうした火事に対し、こも別格な気をつかつたようぢや。

その他

この回は、町触の中の火事についてこの項目を取り上げ、当時の令政の一部を

町触の中には、この他にも「衣食住に
する規定・注意、またお病人・捨て子の様
・犯罪人の人相書などをかいたものなど
ありまゝ。

町下町支配の下部組織としては、市民の
若組織が認められていたといひます。こ
の自治組織の基礎となつて、『町触』は
町下の秩序立てとして働いていたよう
で、市民は、近隣の10家ご組合をつくり、
を扶助と検察の組織として『自治組
成していただいたりしよう。こつした自治組
は、後、五人組の制度として、幕藩体
を、根底から支えるものになつていたよ
うです。

庶民のくらし……城下の大部分を占めて
庶民・士農工商の身分制度の下で、と

くする將軍「吉宗」の一字をもらひ、うけ
通春改め宗春としたのである。が、この
を継ぐことになつて、陸奥国梁川(ヤナガ)
三万石を領した。同十五年兄継友(オホ
藩主)の死により、宗家を継ぎ、尾張や
代藩主となる。

吉宗の將軍継嗣と宗春に対する関係
正徳二年、六代將軍家宣は、新井白石を
その病床に呼び……自分の死後、継嗣と
なるふ家継はあるが、この子はなほ、幼
少である。古来幼主の時、世の中が無事で
あった例は、多くない。神祖(家康)が三
代をたてたおかしなところは、こつような時の為
であるのであるから、尾張殿(四代吉通)
に後を譲り、わかちが、幸ひに成人した後
も、尾張殿の一存にまかすべきであらうか
あるいは、また、幾人もあつた子供の中
から、一人の世に、残るべき子であるから、

の中で、自分たちなりの生活を、精一ぱい
に、生々とした送つていたのだしう……
しかし、身分的な圧迫も決して良のがす
わけにはいきません。今後、どうした面
かとも庶民のくらしを、追つていきたい
と思ひます。

終り

◎参考資料

『名古屋最事目』
『名古屋城史』

《尾張藩中期》

宗春について

庄の立ち

三代藩主細誠のオナ子として生まれ、
冷飯食ひである。祖父の二代光友のとき、
支藩となつた叔父義昌の大久保家は、三代目
義貞が吉宗十四年五月に死んで断絶になつ
ていたが、同年八月通春が跡を継いだ。
通春とは、宗春の先名。宗春とは、時を同

政しこもらい、もしわかちが不幸にして、
死した時は、尾張殿に將軍家を継いでもらう
ということになすべきであらうか？……このへ
つの中のいづれにしたらよからうか(折た
く柴の記)……と尋ねた。

しかし白石は、「若君が世を継がれるのに
何の御心配もいりません。」と、答えた。
しかし、彼は六才で危篤に陥ち入り、後見
の必要が生じた。当然尾張家から出るもの
と期待していたのに反して、兄伊から吉宗
が出ることにした。そつが一藩あげて失
望し、吉宗に対する不満は極めて大きかつ
た。当然、宗春の吉宗に対する反感も強く
、又治着の文場としても、強い競争心とい
ひていた。

参考・吉宗について

紀伊の三代藩主光直のオナ男として生ま
れ、越前三万石を領したが、三代藩主と

いがけなくも、本家紀伊藩を継ぐことになつた。その間に、藩の財政窮乏をきりぬける治績をあげた。

3. 宗春の政策方針とその反映について

性格の反映について

これを知るには、宗春が相続の翌年七月甲午、初のお国入り先立つて、藩主としてこの自戒と施政方針をきこめた「温知政要」を参考にして、こつとりはやく説明しよう。

「古より国を治め、民を安んずる道は、仁にとどまる事なりとぞ。我れ武門貴族の家に住るといへども、衆生の末席にあり……はからずも嫡家の正統を受け継ぎ、藩屏の重職に備へり。つらつら思惟するに、天下への中誠を尽し、先祖の厚恩を報せんことは、国を治め安んずる、臣民を撫育し、子孫をして諸臣に付する。これ我が本意をあらわぬ人にも知らし、永く遂げ行ふべき誓約なり。」

儒の趣き、世に……て希代の名君と打ち寄る評判し、世のとなへたかたばらず、大打ち重都までも宗春卿は慈悲者なりと知る。士民漁夫までも、衆如尊出世の恩いなき、周公、孔子といふことも、これに過かざらぬ。聞き伝へ、聞き伝へ感涙を流し奉る事なれり。(元文世談雜録)

窮屈な重保の政年がはじまつて、はや十数年「温知政要」のいう各種法令の頒布や度々過した使約や下情に通じすぎへの批判、土地繁盛の積極策などは、將軍吉宗に、真向うかう対立するものであつた。

4. 宗春の政策による社会の変化

宗春は、徹然自の政治理想から、將軍吉宗の緊縮財政政策を無視して、積極的に民心解放策をとり、已から進んではゐない衣裳をつけ、市民の意表に出るような行動を試み、武士の起居風物を許し、劇場の新設や遊女

の証本ならうへ、まさに上下和熟一致にあつて事を欲するがため、しか言つた。当時この種の本と言へば、時代を反映して、儒教的名言金句集となりがちであつたが、それと違ひ、思ふ事をそのままに和字に書きつづけたものである。

補著述の意図と世間の反応

◎意図

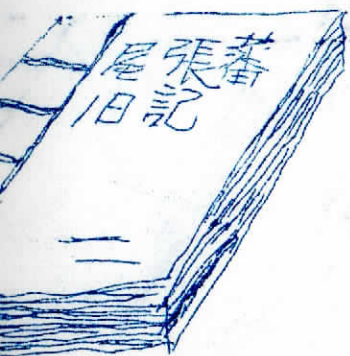
衆教を以つて、きつと号令せしむるにあらず。人々常に座右にさし置き、つづきに我が本意を知り、いざれり時、此の心持ちを失はず、自ら心も正しく身を修り、政道の助けにもなることを欲し

この意図をまとうするために、大衆本をも出版しようとしたが、京都西堀川の木屋が京都の町奉行所より出版を禁止された。これは幕府からの弾圧が一歩であつた。

◎世間の反応

「温知政要著述」の二巻の意図、御覽

変した。が彼の政策は、幕府の許さぬところであつた。否、武家生活の現実が許さなかつた。ミウ時代を転換として、城下町は都市として、画期的な発展を遂げた。名古屋の繁華に京がさめたと云われたいようは、京の経済繁栄をものしり、教を授けた。大阪の巨商は、出店を名古屋に設け、東海商圏の中心地となり、周辺都市にならぶものになつた。上方役者の下り興行が連年大あたりをつづけ、やがて十八世紀の末年東國の名優の訪来にもめいまれ、甚どる名古屋への伝統は動かし難いものになつた。



都市計画班

名古屋の町の形成

名古屋の町は自然發生的にできたものではなく、江戸時代の始め、人工的に計画されて成立したのである。即ちそれが名古屋城築城と、それに伴う「清洲越」である。次に名古屋の発展に寄与があつたのが、享保の宗春時代であるが、ここでは慶長の草創時代の名古屋築城・清洲越について述べてみよう。

まず、なせ當時は小松原の丘でしかなく、た那古野（名古屋）に城が築かれたかという、それは大阪方の押えにこの付近に拠点があつたからである。そこで徳川家康は清洲城に九子義直を封じ、そこを大阪方の押えにしようとした。ところが家臣の山下氏勝が、清洲城は水害と水攻めの危険、二重堀・へいだけの古くさい城、城下町がやたらに膨張していることなどを説い

てその移転を強く主張し、その移転候補地として、小牧・古渡、那古野の三か所をあげた。それを家康が那古野に決定したのである。那古野に築城が決定された理由としては、平野の中核地点、陸上交通の要地、河川の領有、軍事上の要害の地、海運の便がよいことなどが考えられる。すなわち、那古野の地形は東北に山があり、遠くに木曾の山々をひかえ、南に海が近く、西北に木曾の大河をひかえ、城北には人馬の背の立たないほどの湿地があつて、大阪城の地形によく似ていたからである。

名古屋城が築造されるに伴つて、清洲城下町の移転が始まつた。これが俗にいう清洲越である。清洲越は慶長十五年（一六〇一）から同十八年（一六三三）の四年がかりでやつと完了したのであるが、その規模は大きく、人数約六・七万人、寺院約一〇、侍や町人の町名六七、さらに五条橋など、城下の大部分が移転された。この移転計画の直接の対

象は清洲城下町の人口だが、将来十二万人程度を予想していたらしい大規模なものだつた。

次に名古屋城下町の様子を見てみよう。

城下町名古屋は東西五二町（約五八町）南北五五町（約六二町）の三角形にのび、面積は清洲の五・六倍もある雄大な規模である。

この城下町の侍町・寺町・町人町の配置

には防衛上の面などからいろいろ苦心がはらわれている。すなわち、町人町を中央

の台地に配置し、その囲りを侍町や寺町で

囲んでいるのである。寺町というのは防衛

上の政策から寺院を二三の地域に集め形成

した町である。それには城から南方の南寺

町と東南方向の東寺町とがあり、防衛の弱

い方面に配置されている。また町人町でも

軍需に応ずる鍛冶屋町、鉄砲町などは城の

近くに、瓦屋、鍋屋等は町外れに配置して

ある。侍屋敷は城の北は湿地なので、主と

して城の西側と東側に配置されている。

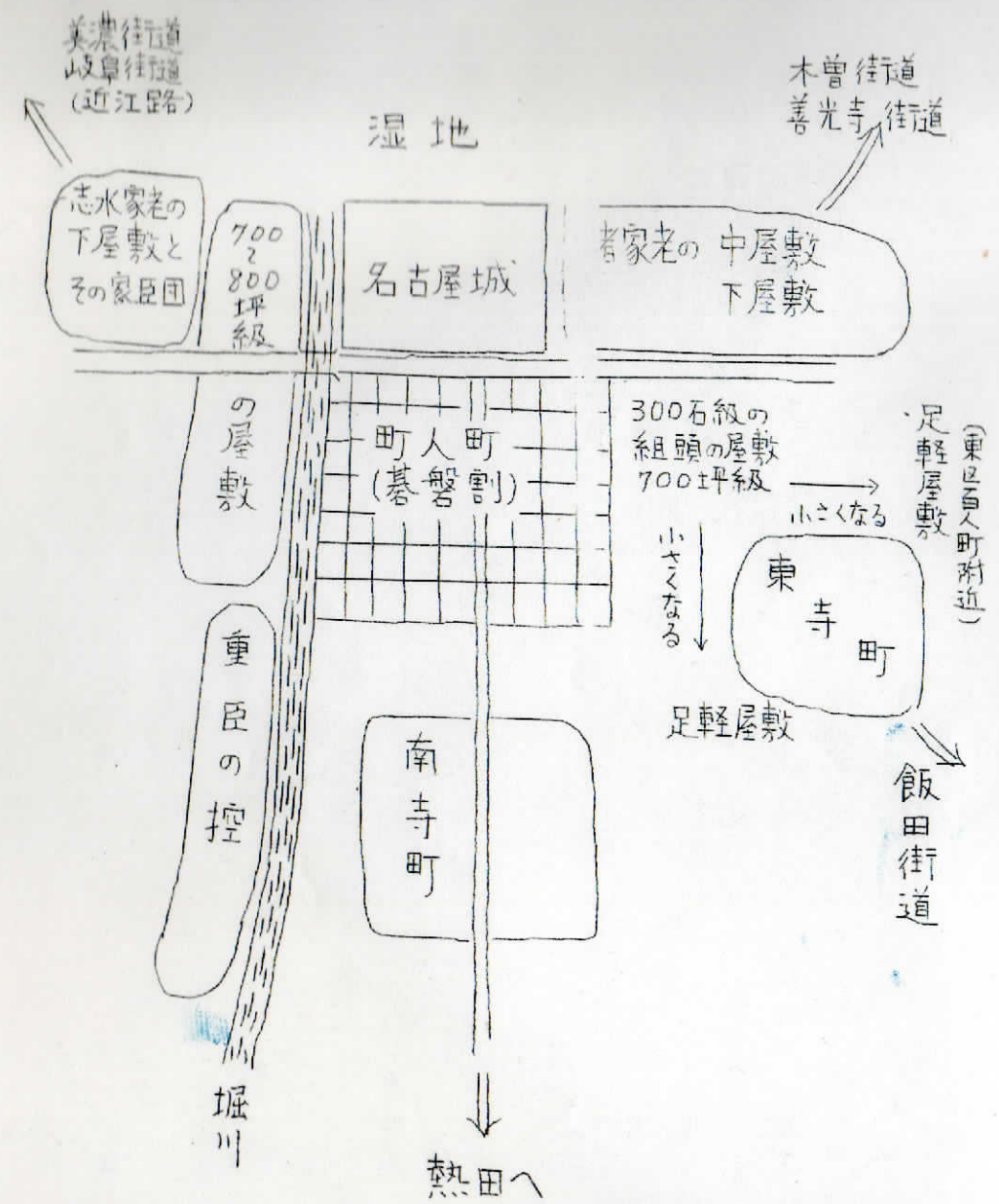
特に、城の西側の方に重点がおかれていることは、城の右側は三百石級の七百坪級の屋敷から百坪級の足軽屋敷の集団が配置され、左側は七百・八百坪級の屋敷が多いことなどからも見当をつけることができる。

その他侍町に丁字形の町が多く、七曲りや、交叉路のくい違いを配しており、道の数も城の右から侵入されにくいように、南北方面の道が少く、城の西方は東西方向の道路が少くしてある。

次ページに、当時の名古屋の町の概略図を示してあるからそれを参照していただきたい。

なお地割りは、小野寺源太、町割りは三沢藤三、普請奉行は松井武兵衛（五百石）である。

名古屋城下概略図



侍屋敷の配置

城郭は本丸と天守および御殿とし、二の丸が藩主の居館および政府にあてられた。三の丸は大名小路と称し、成瀬隼人正・竹腰山城守以下、志水、渡辺、石河の万石級から山村、千村、織田、横井、大導寺、滝川、山澄、生駒、鈴木、間宮、毛利等数千石級の邸宅が立ち並んでいた。そして、本町門の西側片端筋角には評定所と町奉行所があつて、それより東西に大身の武家屋敷、三の丸の家老や重臣の邸宅が並んでいた。この三の丸の家老や重臣には本邸の他に広大な中屋敷、下屋敷、控（別荘に当る）を与えられ、巧みに城下の要所要所に配置して警備に當っている。城の東方の崖に沿つて大曾根まで、成瀬、石河、竹腰、渡辺の諸家老の下屋敷や中屋敷が続く、その家臣によつて守られている。また堀川に沿つて納屋橋の南方西岸に重臣の控がならび南は断天山の近くまで達し、水主町附近にある千賀奉行を始め、水軍の

屋敷とあいまって防衛に當っている。城西の押切方面は志水家老の下屋敷とその家臣団によつて固められている。外堀に沿う千坪級の屋敷や城西の上宿方面は重要な位置であるから七、八百坪級の屋敷が配してある。城の東は山口と呼び、白壁町、種木町方面は三百石級の組頭の屋敷七百坪程度のものが多いが、東へ漸次五百坪、四百坪と縮少し、百人町、黒門町、城番町など百坪級の足軽屋敷の集団に終っている。その南方にある武平町から前津方面は前津と呼び、本町以西、納屋橋以南は広井と呼んだが、山口方面と同様南方に向つて次第に屋敷割が小さくなり、外側は足軽屋敷となつてゐる。

寺町の配置

寺院は城下の防備上、防備の弱い方面へ配置された。またそれは散在的なものと、集団的なものとがある。散在的なものは、城の外郭をなすとき、建中寺、長久寺、

虎寺などのようなものと、甚盛の寺などがある。最在する真宗の百坪級の寺院などがある。全国的なものには南寺町、東寺町がある。南寺町は寺院約五十五、寺域十五万坪か
なっており、禅宗の寺院が多く、白林寺
秀寺、総見寺（臨濟宗）、万松寺、大光
（曹洞宗）、性高院（淨土宗）、その他
ツ寺、大須観音、本願寺などがある。
東寺町は寺院約四十、寺域三万坪からな
ており、日蓮宗の寺院の多い法華寺町へ
（小川町方面）、曹洞宗の寺院の多い禅寺
（現松山町・南小川町方面）などがある。
このように末寺は一地域に結集され、よ
統制されているのである。

町人町の配置

町人町は城下町の中心部にあつて、侍町、
町によつて囲まれた地域であり、甚盛の
このように区画されている。甚盛割の区域
御園町から久屋町まで東西十一町、外
堀から堀切筋（後の広小路）まで南北九町

路である。

源路

名古屋 二里 清洲 一五里 稻葉 一五里 萩原 一里
起 墨俣 一五里 大垣 一里 垂井 一里 中山道

その他に佐屋街道、岡崎街道、伊勢参宮
街道などがある。

参考文献

名古屋城史、愛知県史、名古屋都市計画
史、名古屋市史、名古屋都市計画の源流
に関する一考察、etc.

範囲で、名古屋台の上に最大限に区画し
た。のと言ひうる。従つてこの当時は、今
の広小路が名古屋の町人町の南端であつた
のである。

名古屋を通過する街道

中山道は名古屋に最も関係が深く、それ
は、本管谷から美濃にはいり、尾張の北辺
を通過している。そして中山道の大井、上
田、加納、垂井の各駅から、善光寺街道、
本管街道、岐阜街道、美濃路の各路線が分
れて、名古屋の大曾根、清水、押切にはい
つて、京町、本町に集つてゐる。名古屋と
熱田間の宿との連絡は最も緊密であつたか
ら、右の諸街道は、東海道と中山道との連
絡路としてもまた重要である。だからこの
街道には常に屈曲をつけたり、同じ方向の
道路を二つと少なくしている。飯田街道、
柳街道に對しても同様な道割となつて、防
備に苦心の跡が見られる。中でも中山道と
の関係上最も重要なのは京都方面へ行く美

『祭』

花祭、山王祭、ねふた祭などの祭には、その形態がある。しかし、人間の作つた化である以上、すべての文化現象と同様、祭もまた、人間生活の客観化であり、人の対象化されたものである。時には、人の生活の進歩に衝くが時には、それと相反し、抑制する働きを持つてきた。我々は、祭といふ文化現象を、現代、祭が保護するべきものであるとすべし、いかなる形態も、根本的モチ、フとして調べて見た。これは、現在日本にある祭を類型的主なものは、二つの祭、つまり

名古屋まつりとその周辺のまつりをより具体的に発表する方法を取った。
以下、中心に入らるまえに、祭の形式的展開という方向の井より、簡単に祭とくえておくことにする。
まづそれは「まつり」の名詞化したものであり、原始においては、人々の全行動の規範として働いていた、すなわち、原始においては、タブー信仰、つまり、神秘力のあるものに対する禁忌の信仰のような形態を持つており、それより発生した儀式にいたが、人々は行動したものである。この儀式、儀礼を祭といふた。

直接の接触は禁忌

神聖なるもの

（自然名前）

女性動物等 間接的手段儀礼（祭）

人間

人間は、類型的社会的存在であるため

日熱田大山祭

大山祭は毎年六月五日熱田神宮南新宮社で行なわれ祭であり、京都の祇園祭、津島の津島祭と共に同じ天王祭で、大山車と小車の車衆が各町から曳き出されて盛大に行なわれる。

①へ起源

一条天皇の御代、約西暦千年頃、疫病が全国的に流行し、熱田付近も例外ではなかった。毎日毎日数多くの里民が苦しめ死んでいった。熱田の里民はおののき恐れ、新たに疫神（牛頭天王）を祀り、疫病を癒す。地方の里民は幡（旗）鉾（棒）を献じて、疫病を祈った。それより次第に疫病も消滅していった。その翌年より毎年六月五日布

をも、て旗とし、木鉾をつくって、その他いろいろな練物を出し、疫神を奉じて祭典を行なったのが例となった。此の神事が遂に天王祭、或いは旗鉾祭ともいふ様相を呈して

この生産力の上昇するにつれて、社会に本が生じた。この分業は、社会構造すべし、祭にも祭を行なう人にも分業が生じた。

宗教儀礼

世俗儀礼

支配者による世俗儀礼
民間の世俗儀礼

人間は、生産し、自然との戦いによって、生活をつた、儀礼は、人間生活の合理的な分業の計画をするようになった。

祭は、日常生活（経済生活、文化的生活）

非日常生活、民間信仰、通過儀礼

祭（集団）

この祭は、さきより述べた間なく変化を遂げ、その祭と考へて、以下の名をさす。つまり、理解して見たい。

(参考二) 歴史的にみた疫病流行

九〇九	延喜九年	醍醐天皇	—	春夏痘瘡流行
九一五	〃十五年	〃	—	痘瘡が流行するのて大赦を行
九六〇	天曆十三年	村上天皇	—	旱魃一ツき疫病流行する
九九四	正暦四年	一条天皇	—	疫病を免れるため京中の諸人が油小路の井水を引
九九五	〃五年	〃	—	病人を路二に棄てることを禁ずる
九九八	長徳四年	〃	—	—

— 疫病流行により死者多し —

一〇〇一	長保三年	〃	—	疫病流行により諸社に祈る
一〇二一	寛仁四年	後一条天皇	—	京都の人紫野に花園神社を建てて疫病神を祀
一〇五二	永承六年	後冷泉天皇	—	また御霊会を行

(参考二) 天主信仰

崇徳天皇を祇園神又は牛頭天王へ仏教で
のたみに、本地より来りて、種々の身現
と稱した。牛頭は仏教で印度の祇園精舎の
守護神。

尊は神代ノ昔、剡縣の番川付近の牛頭州
に治して居られたと云う。式時南海をさま

よい、白露雨降り、国語の折り、巨旦村来
う宗家のものに一夜を空かれたが、入川
り、た。尊は後に再び此の家に宿し、去
に望んで、蘇民村来に近日此地に疫病流行
する。其の病を免る咒行として、茅輪を
、て授けられた。果して疫病が流行した
蘇民村来の家は免れ、素志鳴尊を奉る。京

の八坂神社の祇園祭に山鉾を曳き出す祭礼
も、又同神を祭る。澤島神社の天王祭の車
衆船を天王川に流へるのも、疫病神祭に起
因するものである。

◎へ変遷

祭のはじまりは当時、鉾をかついで
の番札な行列であつたのが、室町時代の頃
にやうと潤色され山車を飾り、大山車と車
衆を造つて、さう華やかになった。そし
て、その頃から大山車と呼ばれるようにな
つたといふことである。この妻は華麗な山
車も、信長や家康等は好み親んだといふこ
とである。明治の頃になると、鉾のあ
たりにも電線がかけられるようになり、高さ
二のりもあつたといふ山車の行列が、さき
なや、曳き出しは中止となり、山車は特別
の時にだけ飾つたが、太平洋戦争で衆人ど
焼失し、廃絶された。

東照祭

のへ歴史

寛政三年にあらゐる元和四年(一六八八)
から、権現祭として始まり、元和五年東照
宮の建立を経て、翌元年四月十七日から神
輿三基(東照、山王、目元)渡御の式が
の中心であり、祭奉の甲冑武士五人及び七
開所、西鎮治町、桑名町等から出されたわ
すりの警固からなる行列が所をわたり歩いた。
その後、義直の祭振興策によつて行列も
したいに、たぎやかになり、各町はそれ
それ独自の山車を作り、月なやかさを競ひ
さうようになつた。

◎へ内容

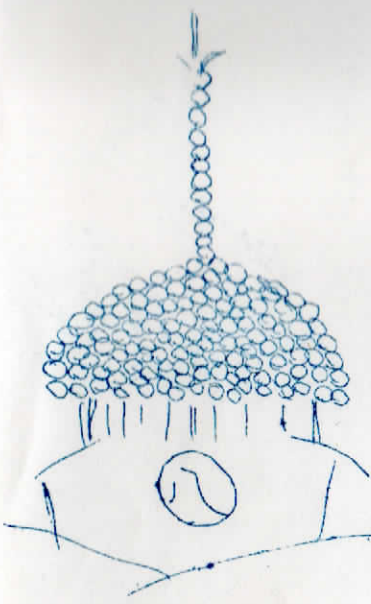
祭礼は城下上げての一大行事であつた。
まず道の両側には竹で造られた柵が設けら
れ、扇風を立てたり、幕をはたり、絵簾

劃の結果として、都市化や過疎化が生じたこと。

産業化による生産力の上昇が、全ての生産単位に家に帰せしめたこと。つまり、相互扶助的共同体が崩壊したこと。

農村の近代化による合理性と個人主義の浸透。

以上の三点が不可分に結びつき、農村を変貌せしめた。その結果、現代において祭の実質的・社会的有用性は減少し、今後商業性によってのみ現代の祭の模範を残すことになってくるであろう。



―参考― 京春と遊里

遊里は義直以来の国祭であった。ただし、若侍の中には「野良まゆし」ゆた「金剛」など、とよんで、京坂から呼び寄せ、30日50日と限って興い置く者があつた。京春の遊里に對する見解として「特色は本心の真実より出る故、飲食と同じ事なり。それ故、その場なりれば男女の心しまりなく、召仕、候女もかえつて遊女の如くなり、おのずから不義も多、家の内外とはず、国の風俗まで悪くなり行くことあり。」と、言つてゐる。そこで、享保16年9月にまず西小路に「遊里」を置く許可ができた。江戸には、吉原、京の島原があるように、別に定處の新町、ミを思いついたのではない。17年の富士見原、葛町に廓を置き、京大阪伊勢が、遊女が集まるもの多く、その数は六百十余人に及んだ。以来、餘西木町、永玉崎、朝日町などに続々と遊里が出現した。

II あとがき II

やっと、ここへ「のすたるじす」が6号が完成しました。まず、その完成までの経過を述べてみたいと思ひます。

御存知、わが号は、新入生歓迎号として出されるはずのものでした。その計画により、4月から原稿募集を呼びかけ、5月はいのめメロが、連絡の手遅れが、中ばに近いたのさ、最初として、原稿の件があまりが、非常に悪く、一年生は、全員退却しました。が、二年生以上は、やつと7人。そのため、発行が、次々遅れ、7月発行となりましたが、提出者はなく、そのため、私自身の判断で、発行を中止し、10月以降としました。

これには、色々と批判がありました。時期が遅くなることよつて、原稿内容の持つ意味がなくなるというのがありました。たしかにその通りで、提出された人には、

ありながら、何人中7人というのでは、とても責任を持つて発行できません。さらにここに白から反省すべき点は、新入生歓迎号なのに、編集は、一年生の仕事になつてしまつたことです。もっとも、サークルの活動になじませるのも目的であり、また、発行が、名大祭前後のため、別に支障もないだろうつと言ふ配慮が、さうです。しかし、どうもすつきりしません。今後改めることが必要ではないかと思ひます。

原稿の提出をもつと厳格にせよという批判もありました。私自身、原稿を集める立場ですが、しかし、かつては原稿を集めるれる立場にあり、理解できますので、あまり厳格にはしませんでした。しかし、4年生の西川義永さんが、忘れずに10月に原稿を持ってきたとき、には、感激しました。この、ここにそれを披露します。

発行が、半年以上も遅れ、機関紙として

してしまつたのは、糾弾委員として、な
 をさておき、深く反省します。どのよう
 して「のすたるじ」を元におり回復させる
 は、現在若うないますか、ここではとや
 く言ひません。私自身、7日を担当す
 責任があり、その過程でも此を実行して
 きたかと思ひます。
 現在、サークル内部で、一年生の出席率
 悪いというのが、取り上げられていま
 私自身は、それには強く反省します。別
 一年生の肩を持つのではありません。私
 が、原稿をあまり催促しないのは、意欲が
 ないからではありません。私の気持ちを察し
 て、皆さんが、積極的に提出して下さるの
 を願つたからでは。しかし現実のよ、その
 ような意欲の疎通は、あまりできなかつた
 ような気がします。意思疎通には、たしか
 場が必要だ。しかし、たとえ場に参加
 した人たちの間にも、その意思疎通が存在
 しないのではなかつたかと思ひます。現在

研 郷

ークルもあまり遠いかないのではないかと。
 又、意思疎通の障害というものは、4月
 ろからあると思ひます。その反省の上
 にたつと、どうも出席をとにかくというの
 はあまりにも、本末転倒・表面的すぎるの
 はないだろうか。
 話が変な方へ脱線してしまいました。
 とにかくここに6号も完成させ、ひとまず
 ホツとしたところで。しかしまた7号の
 原稿を集めねばなりません。この場をかり
 こ、原稿の提出をお願いします。そのため
 に、取り立てをいしむしとやりたいと思ひ
 ・罰金制度も、新にもうけたいと思ひます
 。知識・予見のいか横断している現在、
 は「暴走」やる」ことが必要になつてくる
 のではないかと思ひます。
 伴 金 大

会 社				料 研				号 6				の す た る じ			
突日	22	資月	11	大月	4	付屋	4	名大	4	付屋	4	名大	4	付屋	4
美 敏 裕 雄 美 雄	金 幸 幸 博 次	羽 内 藤 山 井	伴 丹 山 加 青 城	古 和	名 昭	長	員 員	所 日	委 委	行 行	集 集	英 英	編 編	編 編	編 編

原稿は、出そう！